評価テーマに対する提案　　テーマⅠ　全体設計方針

Sense of Wonder 暮らしや遊びの中にあるアートを発見し、可能性と繋がりを拡げる場所

1. 暮らしや遊びからアートを発見する場

テーマⅠ-①事業や活動を考慮した設計の考え方

既存建築を活かし、可能性と繋がりを広げる場所とするため、日常の気配が残る校舎や田園風景の中に、いつもと違う「視点」の場「視点場」を設け、身の回りからの再発見や世界の見方を拡げる力を刺激し、その力が子どもたちの未来や、日常生活の可能性そのものを拡げ、繋がりのきっかけとなる文化活動拠点とします。

図1：発見が「学びのフェーズ」を循環させる駆動力となる。

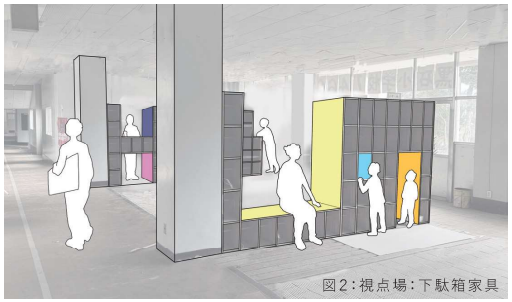


図2：視点場：下駄箱家具

2.「芸術と生きる」ための設え

テーマⅠ-①事業や活動を考慮した設計の考え方

・幅広い創作活動に対応

交流ホール・図工室は、長年一般に広く親しまれてきた写真や絵画・書道・陶芸などの創作活動を支えるための設えを基本として、幅広い世代が気軽に愉しむパフォーマンス等の体験や、映画映像・漫画などの表現に触れることができる場所を設けます。

・様々な使い方ができる展示室

常設展示室は、気密性と断熱性を確保し、温湿度を管理して油絵などを展示できるようにし、多目的展示室は、大型の作品や天然の素材を使った作品など、自由な展示に対応します。また、ギャラリーツアーや体験学習などの鑑賞活動を想定します。

・美術品の保管継承を身近にする

収蔵庫は、存在を感じやすい位置に配置し、通路から覗けるセミオープンな収蔵スペースを設けることで、作品への興味を喚起し、美術品を保管継承することについて、身近に感じられるようにします。

日常生活の雰囲気が残る旧小学校や田園風景が、少しだけ違う見え方をする「視点場」を設け、暮らしや遊びからアートを発見する力を刺激します。

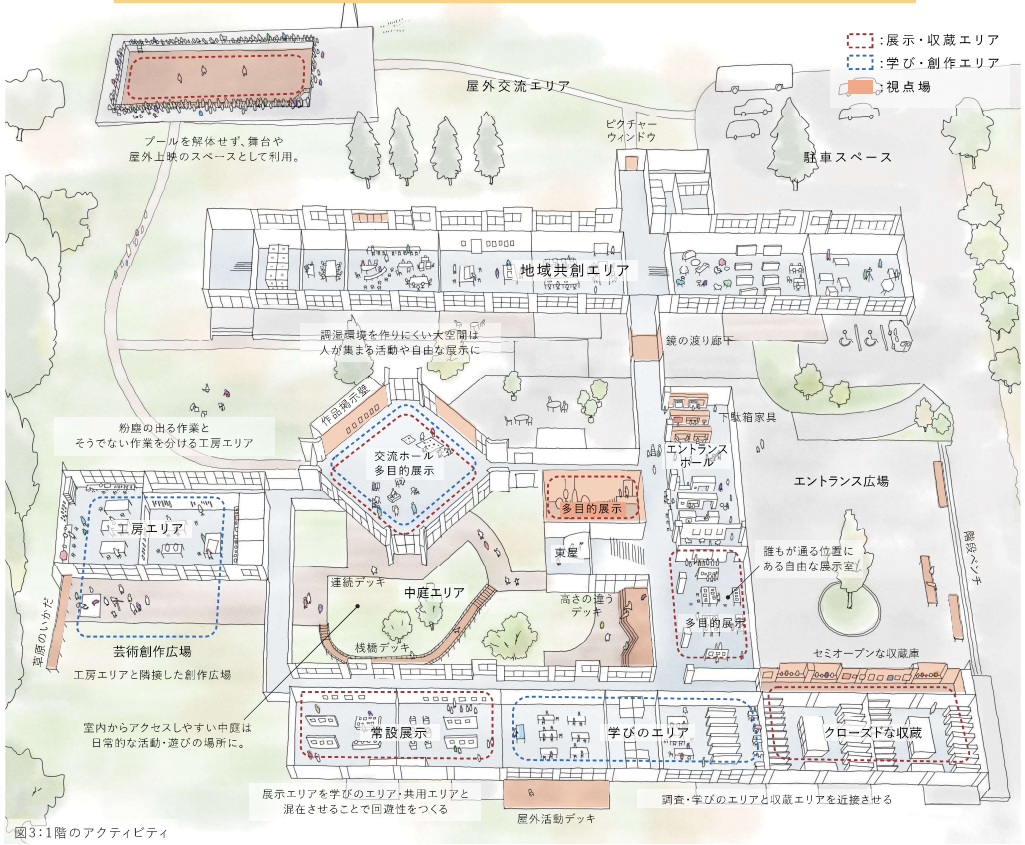


図3：1階のアクティビティ

図4：視点場：作品を掲示できるホール

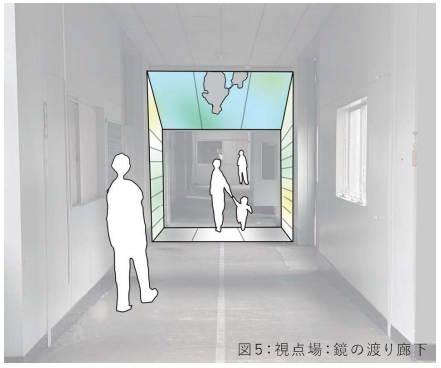


図5：視点場：鏡の渡り廊下

3. まずは訪れてもらうために、多様な魅力を作る。

テーマⅠ-①事業や活動を考慮した設計の考え方

・なんとなく訪れられる、遊び場美術館

「出会う」「触れる」「愉しむ」ことのきっかけとして、まずは訪れてもらうために、自然豊かな敷地ならではの外部空間を中心に、内外に遊べる場所を作り、特別な目的が無くとも日常的に訪れられる美術館とします。外部の遊び場は冬季も雪と触れ合えるような場所とし、内部の遊び場は、夏冬の厳しい環境下でも、子育て世代が安心して利用できる空間とします。

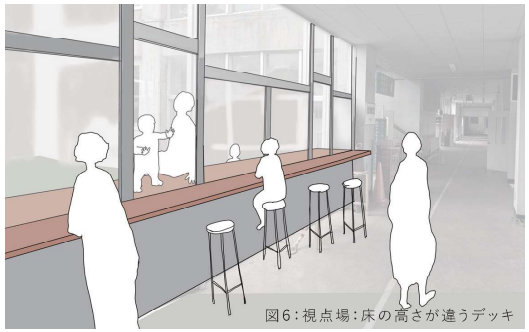


図6：視点場：床の高さが違うデッキ

・インクルーシブな第３の場

子どもたちはもちろん、誰にとっても過ごしやすい、学校・職場・家庭以外の第３の場とするため、賑やかなエリアとは別に、静かで集中できる場所や、対話のできる場所など、様々な場所を作ります。

・より道したくなる回遊性

様々なアートとの「出会い」の場とするため、鑑賞や創作などの目的の前中後に、美術館内の他の活動について自然と知れるような、回遊しやすく、他のスペースへの興味を促すような計画とします。

・一日を過ごせるような、幅広い活動に対応

歴史や地域文化、工藝、手仕事、デザイン、食、まちづくりなど、アートをとりまく幅広い活動を想定し、1日を過ごせるような魅力ある場所を目指します。

・内外にとって魅力ある芸術活動の場

絵画などを展示できる常設展示室の他、ボイラー室などの既存建築を活かした個性的な多目的展示室を設けることで、市民が利用したくなる作品発表の場にすると共に、地域外から見ても魅力ある芸術活動の場とし、外からの刺激を得られる施設とします。

Consolidate & Respect 改装部分を集約し、旧小学校を活かした訪れやすい美術館に。

4. 郷土と、日常と、出会い直す場所

テーマⅠ-①事業や活動を考慮した設計の考え方

・地元の歴史・伝統文化と出会える場所

交流ホールや図工室では、ねぶた絵・こけし・づぐり作りなど、体験を通して伝統文化に触れられるようにします。また、集まって資料や写真を掲示し、まちの歴史や文化を学ぶことができるようにします。

・遊びを通して風土を感じる

季節によって表情を変える田園風景の中で、雨や雪など気候の変化を感じながら体を使ったり、動植物を観察することで、遊びを通して風土を感じられるような場所を作ります。

図7：視点場：季節を感じる観察デッキ「草原のいかだ」

・生活文化に根付くアートを発見する

民藝など生活文化に根差したアートを身近に感じてもらうため、ミシンやアイロンを使った手芸や被服、木工や家具のリペアなど、生活の中でのクラフトや、生け花などの製作・展示も想定します。

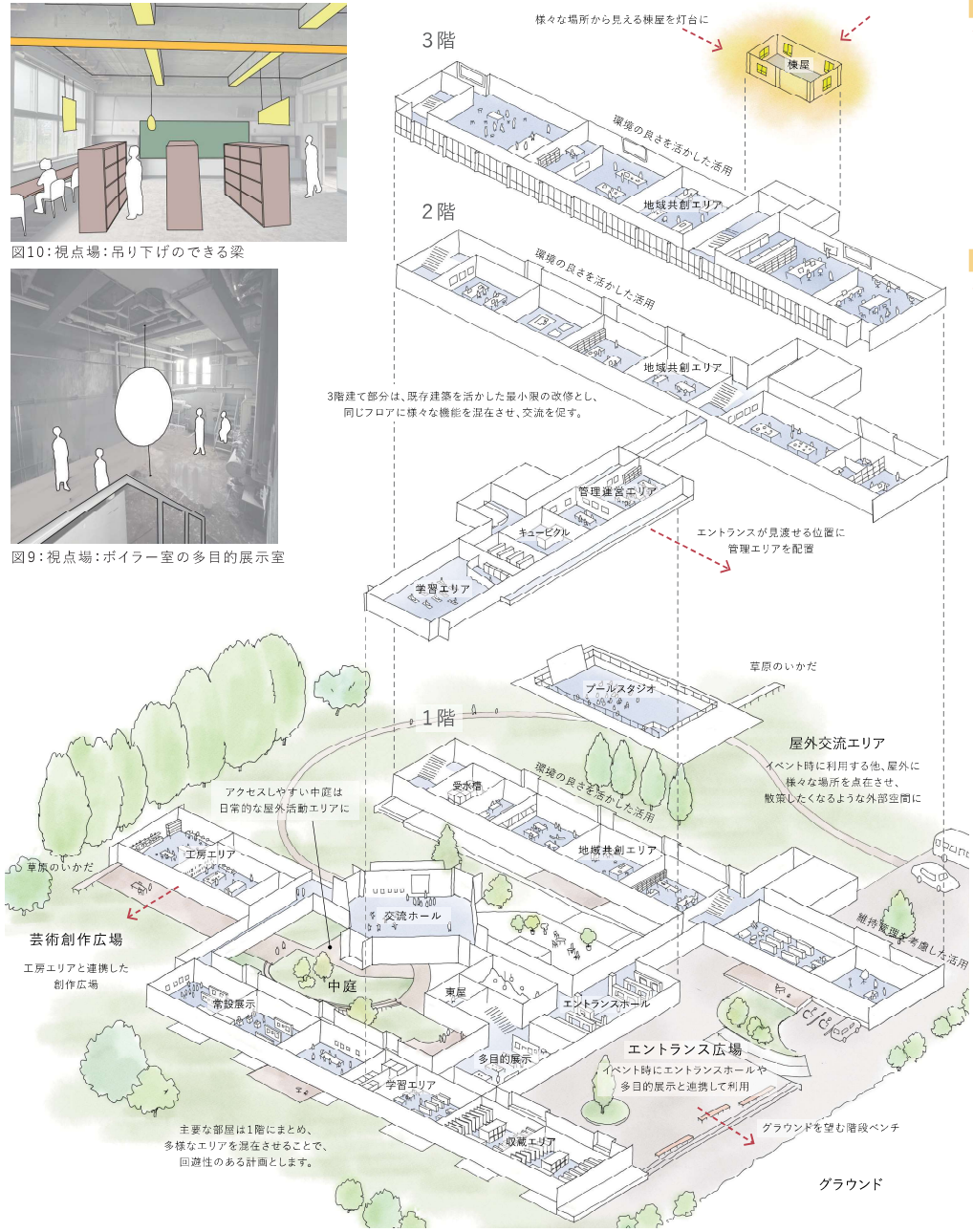
・什器家具を再利用・手作りする

机やテーブルなどの家具は、既存物や地域から集めた家具を補修して再利用し、製作用の広いテーブルなどは図工室で手作りすることで、住民の参加を促しつつ利用の実情に沿いながら整備でき、コスト抑制や施設への愛着喚起を図ります。

図8：視点場：雪が降っても遊べる外の桟橋デッキ

図10：視点場：吊り下げのできる梁

図9：視点場：ボイラー室の多目的展示室



5.誰もが訪れやすい施設

テーマⅠ-②ユニバーサルデザイン・バリアフリー

主要室は1階部分にまとめ、アプローチを含めて段差の無いバリアフリーとします。見通しの効く回遊性のある計画とし、サインは点字を併設した誰もが視認しやすいデザインとします。トイレは多目的トイレを中心としつつ、男女トイレ出入口の視認性などに配慮し、地域の誰もが訪れやすい、安心安全な設計とします。

6.地域と創り育てる地域共創エリア

テーマⅠ-③現状維持エリアの活用に関する考え方

・積極的な参加を促す使い方の検討

3階棟ならではの、地域の田園風景を見渡す景色や、採光に恵まれた環境を活かし、改修は最低限の機能を確保するに留め、場所の魅力を整理した上で、見学会や意見交換会などを通して、住民による自律的で運営維持可能な利用を推進します。

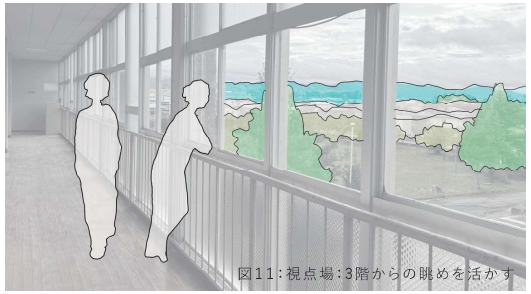


図11：視点場：3階からの眺めを活かす

・学びとアートをつなげる場所に

地域教育の拠点施設として、創作展示施設と併設していることを活かし、オープンアトリエや無人まんが図書館など、表現に関連した利用を想定します。

・自律的な学びを得られる場所

周辺の教育機関と連携するだけでなく、自律的な参加を促すために、学生たちが空間を含めて考え、自分達で作り上げる自習室・美術室などの参加型の企画を提案・サポートします。

・地域との交流が促される場所

できるだけ幅広い活動の利用が同じフロアに位置するようにし、様々な年代や職業の交流を促します。また、学校や学年、年齢を超えて相互に教え合うような協同の学習の場を想定し、アートを通じた地域の交流の場を目指します。

評価テーマに対する提案　　テーマⅠ建設費・維持管理費の抑制　・　テーマⅡ屋外環境の整備方針　・　テーマⅢソフト事業等を含む運営方針

Open Museum　地域の内外に開き、まちと育てる美術館

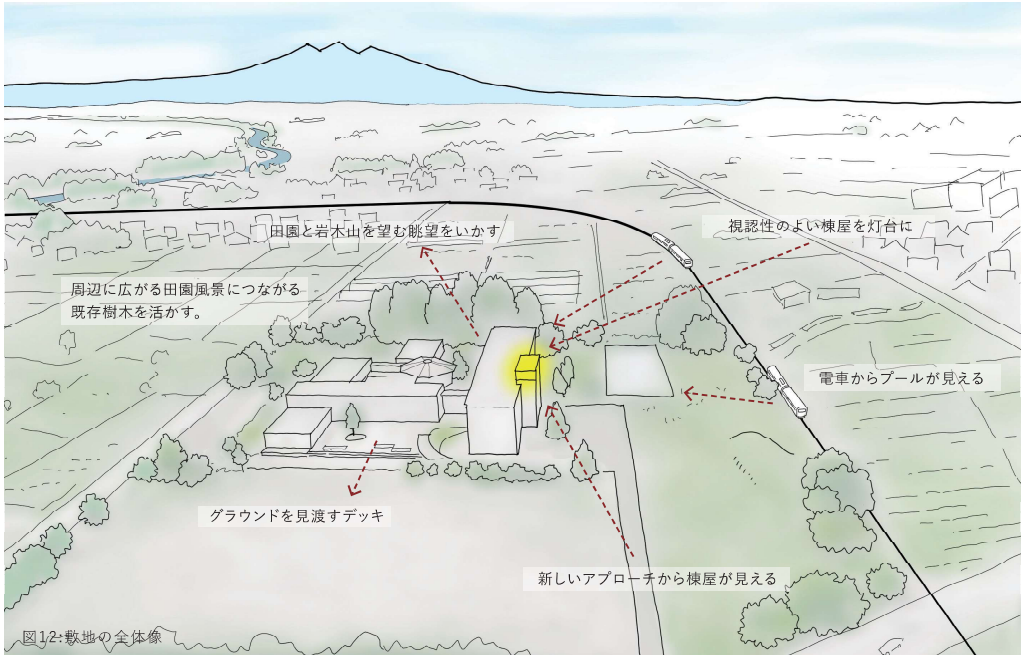


図12:敷地の全体像

7. 維持管理しやすい設備によるコストの低減

テーマⅠ-④建設費・維持費の抑制

・状況に合わせた展示室・収蔵庫の空調

エアコンと加湿器により、作品の保持に必要な調温湿を行い、断熱性と気密性を可能な限り高めることで、ランニングコストを低減します。文化財など厳密な湿度調整が必要なものは展示ケースで柔軟に対応することとし、コストを低減します。

・維持管理を重視した必要十分な設備計画

給水：屋上水槽を取りやめ、1階に設けた屋内設置の受水槽からの加圧給水とすることで、メンテナンスを容易にします。

受電：キュービクルを屋内に設置することで、施工と保安を容易にし、コストを低減します。

空調：1室または数室に対応した個別のパッケージ空調とすることで、イニシャルコストを下げます。機器の交換や増設・撤去をしやすくすることで、施設の維持管理、拡張または縮小に柔軟に対応できるものとします。

8. 集約によるコストコントロール

テーマⅠ-④建設費・維持費の抑制

・既存建築を活かし、改装部分を集約。

既存建築を可能な限り活用し、造作部分を縮小・集約することで、コストの低減を図ります。

・什器家具を再利用・手作りする

家具を再利用・手作りすることで、住民の参加促進や愛着を創りつつ、コストを抑制します。

・既存樹木を活かした維持管理しやすい外構計画

既存の植生や樹木を活かし、外構整備を最低限とし、維持管理コストの少ない外構計画とします。

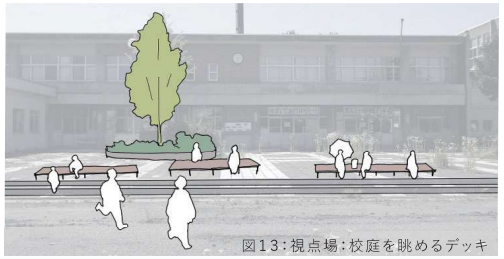


図13:視点場:校庭を眺めるデッキ

9.風土や環境とつながる屋外空間

テーマⅡ-屋外環境の整備方針

・ランドマークとなる美術館

弘南線でアクセスする際に良く見える玄関口の位置にあり、見通しの良い周辺環境を活かすため、棟屋部分を彩色し、明かりを灯して灯台のようなランドマークとします。帰る時・出かける時、電車から市内から、棟屋の灯りが見え、美術館の認知を広げます。

・最低限の設えで既存の屋外環境を活かす

周辺の豊かな田園風景と既存樹木を極力活かし、風土を体感できる屋外空間とします。

・旧プールを夜空を見上げる舞台に

プールを解体せず、舞台や夜空を見上げる映画館として利用します。プールを利用したステージは、屋外散策の目的地にもなり回遊性を高めます。

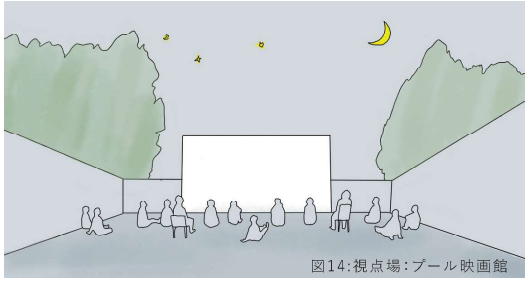


図14:視点場:プール映画館

・除雪範囲を最小限にする

屋外交流スペースは原則として除雪せずに利用し、設備をできるだけ屋内配置し、除雪範囲を最小限にします。

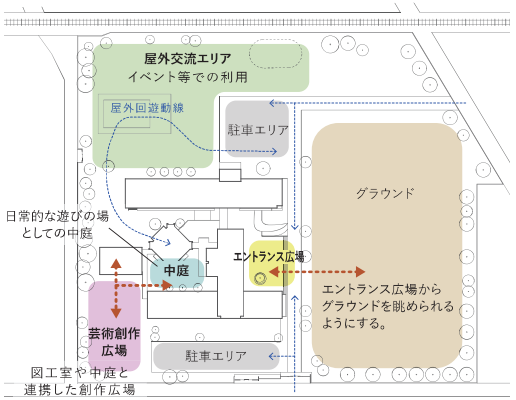


図15:外部空間のゾーニング

10.まちと育てる美術館

テーマⅢ-ソフト事業等を含む運営の考え方

・市民などの主体的参加

黒石市美術施設検討委員会を中心に、関連団体、市民団体、周辺の学校等との連携を密にし、「まちそだて」の一環として、広くアイディアを受け入れながら、運営を重視したソフト・ハードの設計を行うことで、継続して利用したくなる施設を目指します。

・まちの拠点としての美術館

図書館や官公庁が近く、近隣に学校や保育園もあることから、生活動線の一つの拠点として、公共施設等との連携による利用促進を図ります。

また、駅から徒歩でアクセスできる位置にあることから、交通弱者である高齢者や学生の利用を見込むと共に、弘南鉄道の沿線や、こみせ通りなどからの観光動線にかかる拠点としての可能性も考慮します。

図16:まちの動線

・世代やエリアを超えた連携、交流

地域内の作家や市民団体との連携により、アートをきっかけとして市内の幅広い世代の交流の場となるようにします。また、県内美術館5館との連携などを検討し、他地域から見ても訪れたい、市民にとっては外からの刺激を得られる、魅力的な文化活動の拠点とします。

図17:視点場:まちの灯台